縄文時代の生活を探る

―清瀬の原始―

縄文時代の生活を探る　―清瀬の原始―

目次

第一章　旧石器時代……………………3
第二章　縄文時代……………………8

クロマニヨン人

ネアンデルタール人

ホモ・エレクトス

アウストラロピテクス

プリオピテクス

第一章　旧石器時代

1

地球は四十五億年前に誕生し、幾多の地殻変動をへて現在に至っています。しかし人類の祖先の登場は、プリオピテクスといわれるテナガザルに似た原始類人猿のあらわれた二千万年前のことで、地球誕生からの経過からするとごく最近のことです。

地球上に多くの生物が生まれたなかで、人への道程（みちのり）は、このプリオピテクス以後、二百五十万年前のアウストラロピテクスといわれる直立して石の道具を使う最初のヒト科から、火を使うことを知るホモ・エレクトス（直立原人）をへて、十一万年前にネアンデルタール人といわれる脳の容積が現代人とほぼ同じで、さまざまな道具を生み出すことができた旧人が登場します。そして、三万五千年前にはクロマニヨン人といわれる身体的特徴が現生人類と変わらず、フランスのラスコウ洞窟の壁画などを残した高度な文化をもつ新人が現れます。

わが国では、一九四九年に発見された岩宿遺跡（群馬県新田郡笠懸村）以来、各地から旧石器時代の石器を出土する遺跡が確認されはじめ、愛知県豊橋市牛川町からはネアンデルタール人の特徴をもつ人骨片も発見され、洪積世に人類の住んでいたことが明らかとなりました。

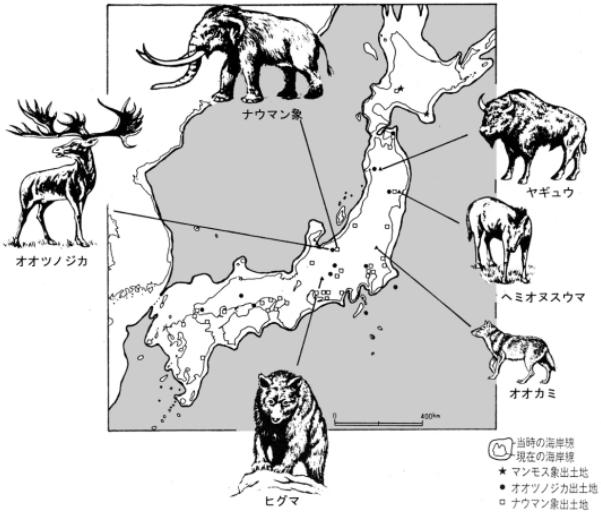
先のアウストラロピテクス以後の地球上には、ギュンツ、ミンデル、リス、ウルムという四回の大きな氷河期がおとずれていますが、人類はこの数万年という間隔でくり返された極寒の時期を経験しながら進化してきたのです。

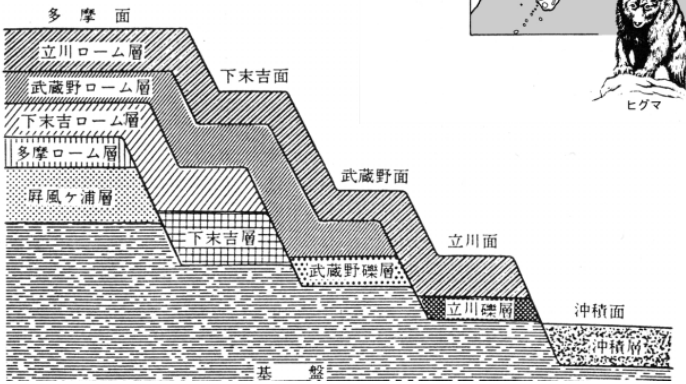
この氷河期に形成された地層は清瀬付近の地下にもみられ、所沢市でおこなわれた地質調査ではギュンツ氷河期以降に堆積した地層が地下七十メートル以上に確認でき、小規模な海面の上昇（海進）や下降（海退）をくり返すなかで堆積した砂や礫からなる層がみられ、当時この地が内湾や外洋に位置していたことがわかります。

そして、地下二百メートルで検出され地層から、アウストラロピテクス属がアフリカの大地に暮らしていた時期に棲息していたサクラガイやシラトリガイなどの貝類が発見されています。

■柳瀬川北岸の崖に露出した地層

■ウルム氷期の日本列島



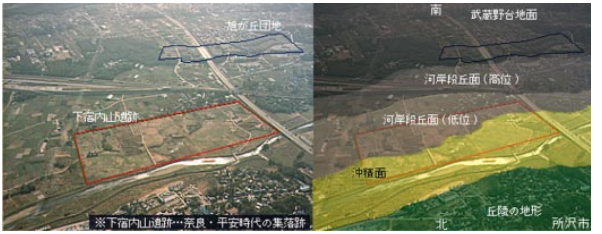


■関東ローム層の堆積模式図

■第四期洪積世の年代区分（所沢市史より）

地質年代区分		絶対年代ヨーロッパ	氷期年代区分	古気候（現在に対比）	海水準(m) 海進海退	関東地方の主な地層(層厚m) 絶対年代（万年）	所沢市の地層	火山
完新世（沖積世）		2,500	サアトランティック期	温度℃	0	有楽町層	沖積層	富士火山
		4,500	サアボレアル期	やや涼	(+)5			
		7,500	アトランティック期	暖(+2°)	(−)20〜30			
		10,000	ボレアル期 プレボレアル期	−6°より暖				
更新世（洪積世） 後期		20,000±	ウルム（第4）氷期	−8°〜−9°	(−)100〜130	立川ローム層	立川ローム層	箱根・中央火口丘活動期 古富士火山 八ヶ岳
				温		立川礫層	立川礫層	
		50,000±		−7°〜−8°	(−)100	武蔵野ローム層(T.P.4.9)	武蔵野ローム層	
		約70,000	リス・ウルム（第3）間氷期	暖+2°	(+)6〜30	武蔵野砂礫層	武蔵野礫層	箱根・新期外輪山形成期 木曽御岳
	中期	約128,000	リス（第3）氷期	−8°〜−9°	(−)100(±)	下末吉ローム層 Pm-1(7.3〜9.5)	下末吉ローム層	
		約380,000	ミンデル・リス（第2）間氷期	涼	(+)30〜40	下末吉層（東京層）	所沢台礫層	箱根・外輪山形成期 富士ヶ岳
		約480,000	ミンデル（第2）氷期	寒	(−)100(±)	多摩ローム層	多摩ローム層	
		約500,000	ギュンツ・ミンデル（第1）間氷期	暖	(+)30〜60	びょうぶが浦層 長沼層・豊岡礫層	芋窪礫層	
	前期	約600,000	ギュンツ（第1）氷期	寒	(−)100	富岡層 中里層 小柴層・梅ヶ瀬層	狭山層（谷ツ粘土層 三ツ木礫層）＝M互層 K層	—?—
		約2,000,000	ドナウ寒冷期					

■柳瀬川沿いの段丘崖（下宿地域）



さて、氷河期は、遊星間の引力の影響で起こる地球の自動軸の傾きや太陽をまわる地球軌道の比率変化。つまり、数万年を周期とする太陽輻射熱量の変化によるもので、それによる地球規模の寒・暖期が、四つの氷河期とそれぞれの間氷期を引き起こし、海進・海退といわれる海水面の上昇と下降をもたらしたと考えられています。

この海水面の変化についてみていくと、七万～二万年前のウルム氷期では、年平均気温が現在より八～九度低く、南極・北極や山岳部などの陸上に蓄えられた氷が約四千平方キロメートルも増加していたことが想定され、地球上の全海水からこれだけの水量を取り去ると、海水面は現在より百二十メートルも低下していたことになります。

この最後に襲ったウルム氷期の海面低下で、日本列島は南北で大陸とつながり、シベリアからマンモス象、トナカイ、ヘラジカ、ヒグマが、また中国北部からナウマン象、オオツノシカ、野牛などの大型動物が移動して来ていました。

氷河期には火山活動も活発で、関東地方では古八ヶ岳や箱根の外輪山形成時の噴火にともなう降灰がくり返し、古い順に多摩ローム層→下末吉ローム層→武蔵野ローム層といわれる粘土質の赤土層が堆積しました。そして、大型動物が氷の陸橋を渡って移動してきたウルム氷河期には、噴出源を異にする八ヶ岳や箱根中央火口丘、古富士火山からの火山灰が降りつづき、立川ローム層といわれる新しい火山灰層が形成されます。

これら各種の火山灰層は、河川沿いでは削り取りの影響を受け、段丘面を発達させます。

柳瀬川沿に見られる階段状の地形は―旭が丘団地以南の平坦面、旭が丘団地北側の崖下から関越自動車道と武蔵野線が交差するまでの平坦面―、武蔵野ローム層、立川ローム層の堆積した時期にこうして形成された河岸段丘面で、これらはウルム氷河期の百メートルを越す海退で、落差を増し、急流となっていた古柳瀬川に削られてできたものでした。

ウルム氷河期の武蔵野台地は現在の北海道のような気候といわれ、火山灰のために植物の生育は悪く、タンポポやヨモギの草原がつづくなかにスギやマツなどの針葉樹の林が散在する景観でした。そして、このウルム氷期が終息しだす二万年以降、当地にもようやく旧石器時代人の存在した形跡がみられはじめます。

2

旧石器時代の遺跡を紹介する前に、武蔵野台地の地形を観察しておきます。

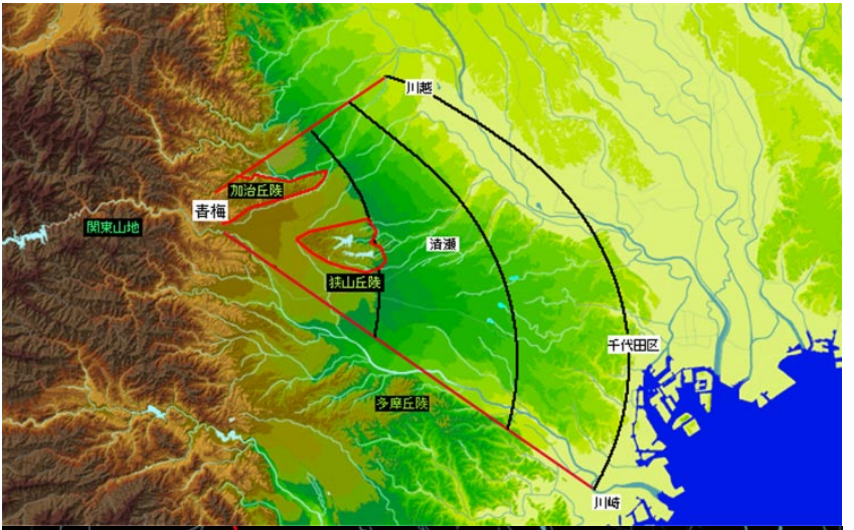
武蔵野台地は、関東山地の縁の青梅市を要として北は入間川から南は現在の多摩川へ流れを変えてきた、古い時代の河川（古多摩川）がつくりだした広大な扇状地です。

氷河期には今と違い、青梅市から東の東京湾への地形は急傾斜で、古い時代の多摩川が関東山塊の岩くずを大量に排出しながら流路を南側へ移すことで、扇形に武蔵野台地の基盤をなす礫層（武蔵野礫層）をつくりだしています。

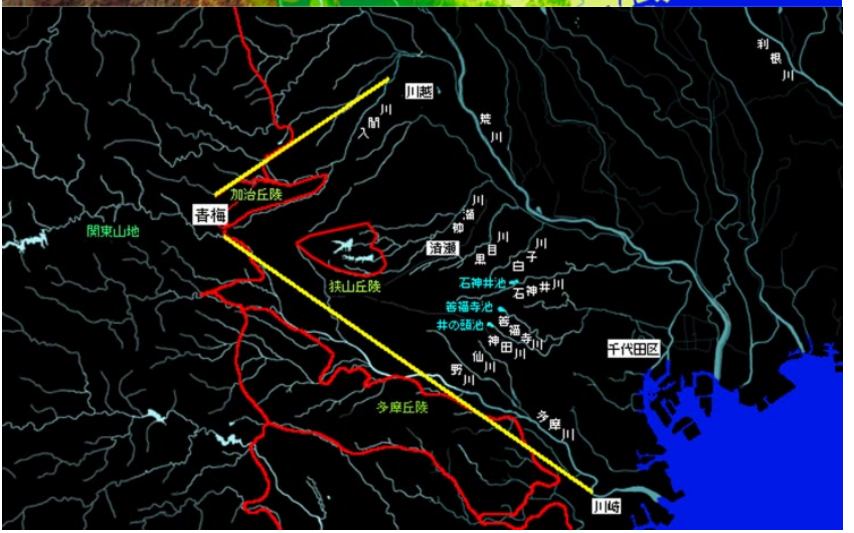
そこに先に説明した火山灰が降りそそぎ堆積するわけですが、武蔵野台地の中央には古い時代から存在する独立した狭山丘陵があり、それを水源として柳瀬川が形成されています。

ここでは堆積した火山灰が、河の流路変化とともに削り取られることで三段の河岸段丘が発達していますが、

■扇状地形模式図



■武蔵野台地周辺の地形と河川



上流に向かうほど流路変化が小幅になるために段丘面が統合されて深い谷を形成しています。

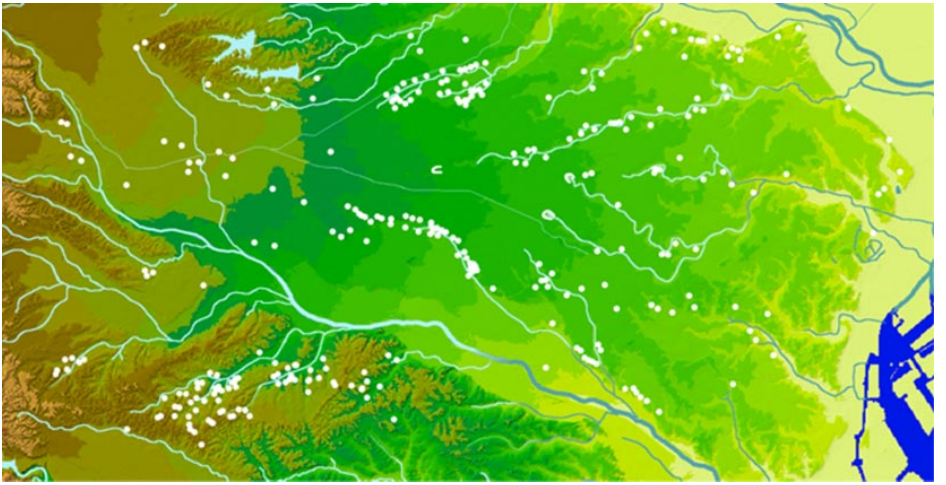
この柳瀬川のほかに黒目川、石神井川、神田川などの小規模な河川がありますが、これらは扇状地の武蔵野台地西側に降る雨水が礫層に浸透し、その中に形成された粘土質の層上に蓄えられ、地下を流れ通って標高五十メートルほどの低まった地形で伏流水となって湧き出たもので、それを水源としています。

石神井池、善福寺池、井の頭池などがそれで、そこから湧き出した水が川を形成して東へ流れ下っているのです。

こうした原地形を観察することで、武蔵野台地の中でも動物の生息しやすい場所や人が住みやすく、また移動しやすいルートもイメージされてきます。たとえばシカやイノシシは泥をあびるぬた場を好みますから石神井池や善福寺池は好適地だったことでしょう。

猟師の間では面白い伝えがあります。こうしたぬた場には山の神がいて、そこで祈ると獲物

■武蔵野台地の旧石器時代の遺跡分布



が現れるというのですが、それほどぬた場は動物が好み、集まる場所のようです。

清瀬では、古くは空堀川や東川が柳瀬川へ合流する地点に沼がありましたが、付近には縄文時代の遺跡が数多く残されています。

このほか、台地上に現れる小規模な湿地もあります。これは梅雨時など雨がつづく季節に現れるもので、そうした場所は古くから火山灰が堆積する台地上に、雨水があつまり流れ出すことで、火山灰が削り取られ、地形が低くなっています。

清瀬駅からけやき通りを北へ歩くと、郷土博物館のあたりで東西につづく低まった地形を観察できますが、それがいまでも水はけの悪いそうした土地です。

今は住宅が密集し、地形を確認することが難しくなっていますが、注意して歩くとさまざまな地形変化を観察することができます。

狩猟生活の時代に限らず、近代に入るまで、地形は人々の暮らしに大きな影響を与えています。

3

清瀬では旧石器時代の遺跡が五ヶ所発見されていますが、このうち一定期間居住した形跡の認められるのは下宿に所在する強清水（こわしみず）遺跡と中清戸（なかきよと）の伊勢遺跡で、いずれも短期間の居住跡です。

これらは、平野部での狩猟期間の移動にともなう簡易なキャンプ跡と思われ、拠点的なベースキャンプにはオオカミやクマから身を守り、子を産み育てるのに安全な山間部の岩陰や洞窟が、また草原地帯がつづいていた武蔵野台地では針葉樹の散在する段丘崖を背にする場所がえらばれていたようです。

青梅市を頂点として東へ扇状に広がる武蔵野台地では、中小河川の流域に数多くの遺跡が残されていますが、それらの多くは短期間居住したもので、季節的にベースキャンプから分かれた狩人たちが、オオツノジカやナウマン象などの大型獣を追いながら河川づたいに移動したキャンプ跡だったようです。

先の伊勢遺跡も、こうした狩人たちの簡易なキャンプ跡と思われ、周辺地域で狩りをおこなうために短期間居住した跡ではないかと考えられています。

この遺跡は柳瀬川から離れた場所に位置していますが、南方の黒目川との中間に位置し、それぞれの川に集まる獲物を交互に見張りながら狩りすることのできる最良の場所だったに違いありません。そして、なによりもこの付近には台地上でありながら立川ローム層堆積以前の河跡が地下にみられ、河床跡に形成された粘土層により雨がつづく時期には沼のようになる場所があり、水を得る

ことも できたわけです。

余談ですが、江戸時代の上清戸村にも水はけの悪い土地があり「野水堀」という小字名が検地帳に記録されていますが、台地に深く入り込むところではこうした場所をキャンプ地に選んでいたようです。

伊勢遺跡の旧石器人は、豊富な獲物がいたと思われる柳瀬川と東川の合流点付近を主な猟場とし、ここで槍などによる狩りを展開していたようです。

一日の狩りを終え、焚き火に集うかれらは、獲物を縛る縄や道具を入れる革袋をつくり、また黒耀石製のナイフの刃こぼれをなおすため、尖らせた鹿角の先端をナイフの縁にあてて押し割る作業をおこなっていたことでしょう。

かれらは槍のほか、獲物の解体や各種の道具づくりに用いる石のナイフ、そして火を起こす道具などをたずさえて移動していたのでしょうが、このような道具類のなかには遠く長野県の霧ヶ峰周辺に産する黒耀石でつくられた石器も含まれています。

この黒耀石は天然ガラスの一種で、その鋭利さは金属の加工を知らなかった当時では、打ち欠くだけで鋭い刃をつくりだすことができる貴重な素材で、木や鹿角の細工には欠かせないものでした。しかし、この石は遠方からもたらされたもの。伊勢遺跡にいたかれらのように、ベースキャンプを離れて移動する人々には途中で補給することは困難なものでした。

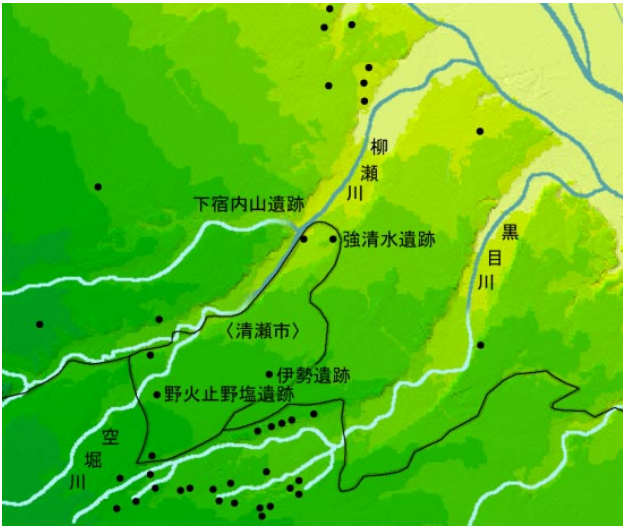
伊勢遺跡では黒耀石製の石器を制作していた形跡は認められませんが、このことはかれらの保有していた黒耀石の道具が、ベースキャンプを離れるときにたずさえてきたものだけであったことを意味し、狩りの合間に刃こぼれをなおすていどで大切に使用されていたことが想像されます。

この黒耀石のほか、一般的に用いられる石器の材料にはチャートといわれる硬質な石、また頁岩といわれる泥の固まった軟質ですが薄く割れる石が使われています。

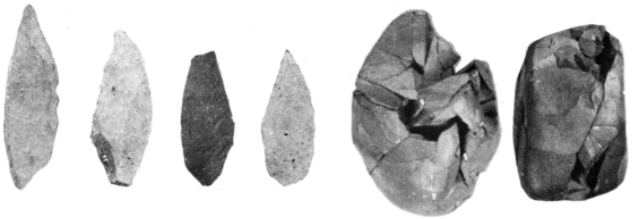
これらは武蔵野台地にみられる段丘崖の露頭や川床で豊富に調達することができ、河川沿いに移動していた旧石器人たちが、狩りの途中に良質な原石を採集していたことが考えられます。

伊勢遺跡にいた旧石器人も、ベースキャンプを出たときにたずさえてきたものだけでは石器を賄いきれなかったようで、河原石十六個、約七キログラムほどの原石を拾い集めてキャンプ地へ持ち込んでいます。

移動期間中に消耗する石器はかなりの量に達していたと思われ、これらの原石はおもに使用頻度の高い、獲物の解体や槍の柄などの細工に用いるナイフ類の制作にあてられていました。とはいっても、質の定まらない河原石からナイフをつくり出すことは大変な作業だったらしく、こぶし大の川原石一つからは二、三点の製品しかできなかったようです。



■旧石器時代の遺跡分布
（志木市、朝霞市域を除く）



■伊勢遺跡出土の旧石器
右…石器制作のために割られた川原石
左…ナイフ

伊勢遺跡からは、石器制作途中で出た、打ち割られた石くずがたくさん発見されていますが、これらの剥片のなかには、ほとんど完成に近い状態で放棄されたものもありました。外見は充分使えそうな気もしますが、石器づくりのプロであったかれらには、使用してもすぐ折れてしまうことが分かっていたのでしょう。

こうした旧石器時代の遺跡では、石器や、それをつくるために打ち割られた剥片、そして火を焚いた跡くらいしか発見されません。しかし、かれらは石器だけを道具としていたのではありません。人類の歴史からみると、作り出す道具としては石より先に木や骨の道具が使われていたという研究者もいます。

骨髄を食べるために割られた骨は先端が鋭利で、人類は、その当初から骨を道具としていたというのです。伊勢遺跡の旧石器人たちは、それから数百万年の時をへているわけですから、生死や自然界に対する観念も高度な段階に達していたと思われ、狩りについても対象とする動物ごとにその生態を熟知した方法が考案され、生活全般に骨・角・革・木・草などを使うさまざまな道具も存在していたはずです。

しかし、酸性の強いわが国の土壌では、骨や角といえども数百年のうちには劣化して失われ、それらの発見が困難なものとなっています。

現在、数多くの遺跡で発掘調査が実施されていますが、それにより知ることのできるのはかれらの実像のひとかけらです。しかし、それこそが数万年という時の長さであり、ある意味ではすべてを土に返して新しい文化へ受けつがせたかれらの時代は、すべてを残そうとする現代文明よりすばらしい思想をもつ人々であったようにも思えます。

タイムライフの『原始人』を執筆したクラーク・ハウエルは、その著書の中で原始人と現代人の相違について次のように指摘しています。

身体的にはクロマニヨン人と現代人は同質であり、現代人の肉体はいぜんとして採集狩猟者であることは事実。しかし、現代人は肉体活動を充分行わない結果、会議などのストレスでコレステロールと脂肪酸が血流中にあふれ出てくることが多く、その蓄積物を燃焼できず、また内分泌腺や神経系の活動を押さえることができないで、深刻な危機にみまわれているとし、以下のように結んでいます。

唯一の解決策は、生活様式を変えることである。われわれの身体組織が何に向くように設計されているのかを知るためだけでも、狩猟採集民の生活を学ぶことには意義がある。原始人を知るようになれば、もう少し原始時代の祖先に似た行動をする必要を感じ、それがより健康な生活に導いてくれるにちがいない。

■弓矢

■落とし穴（野塩前原遺跡）

第二章　縄文時代

1

土器の出現にはじまる縄文時代は、ウルム氷期の終息した一万二千年前から稲作のはじまる二千三百年前までつづいています。

研究者はこの時代を土器の形態変化を指標として

草創期（一万二千～八千年前）
早　期（八千～六千年前）
前　期（六千～五千年前）
中　期（五千～四千年前）
後　期（四千～三千年前）
晩　期（三千～二千三百年前）

という六つの時期に分けています。

縄文時代にはいると気候は徐々に温暖化し、早期の終わりころから前期にかけては現在より気温が二度ほど高くなり、海面が五メートルほど上昇、東京湾が内陸まで入り込んでいました。

氷河期の寒冷な気候に生息していた大型獣はしだいに絶え、それらにかわりイノシシやカモシカ、ニホンジカなど中・小型動物が繁殖しだしていました。また、火山活動の停滞により植物の生育が安定し、氷河期の亜寒帯針葉樹から暖温帯の落葉広葉樹へ、そしてドングリやトチの実などの豊富な食料資源をもつ照葉樹林へと移り変わっていきました。

大型獣が姿を消したことで食料の獲得も変化し、以前にも増して多種類の中・小型動物を狩りの対象としなければならない時代が到来。人々は各動物の生態にあった狩猟方法を考案し、道具の開発をすすめていきましたが、その代表が弓矢でした。

槍の原理を発展させた軽量で迅速な弓矢の発明は、照葉樹林に潜む動きの早い中・小型動物を対象としたとき絶大な効力を発揮し、トリカブトなどの毒物の併用による仕掛弓の開発も可能にしていました。また、イノシシやシカなど沼地場（ころがって体に泥をつける場所）を中心にし、一定の範囲で行動する動物を捕らえるため、落とし穴による猟も早期の末に頻繁に行われています。

落とし穴は、けものみちに沿い仕掛けられますが、穴の底に竹槍を立てて殺傷するもののほか、溝状の穴の底をV字形に狭め、動物の身動きを止めて捕獲するものがありました。前者は凶暴な動物、後者はシカなど足の長い動物を対象にしたものと思われ、生かしたままの捕獲も可能で、落とし穴にも生態や目的による使い分けのなされていたことを知ることができます。

一頭しとめれば相当量の食料が得られていた大型獣の狩猟時代が過ぎ去ったことで、植物資源や海洋資源への依存度も増し、それらの採集方法や加工・保存方法が次々と開発されていたことが想像されます。

鹿角製の釣針、そして土器も、こうした食料獲得の多様化を背景にして出現したものと思われます。

清瀬では、早期の遺跡が下宿地区の強清水遺跡・下宿内山遺跡、梅園地区の野火止野塩遺跡にみられ、このうちもっとも古い土器を出土しているのが下宿内山遺跡です。

この遺跡からは早期前半以降の土器が出土していますが、長期間滞在した跡は認められず、柳瀬川で狩りをしたり、他所への移動中に立ち寄るていどだったようです。

■早期から前期の海岸線

■早期・前期の遺跡分布（志木市、朝霞市域を除く）

これらのうち、強清水遺跡と野火止野塩遺跡は早期後半の遺跡で、複数の炉跡の発見から、長期にわたる居住が考えられます。なかでも強清水遺跡からは旧石器時代のキャンプ跡と縄文時代前期後半の住居跡も発見されていて、各時代を通じ、居住環境の優れた場所であったことが知られます。

これらの遺跡に人々が居住していた早期後半は、縄文時代でも海面がもっとも上昇した時期で、現在の東京湾が、北は栃木県の藤岡市あたりまで、また西は川越付近まで入り込んでいました。そのため志木市や新座市には柳瀬川や黒目川の河口が形成され、海水と真水が流入しあうこの付近には豊富な漁業資源がみられ、早期から前期にかけ、貝塚をともなう集落が点在していました。

これらの集団の生活領域は、河口を中心に各々柳瀬川や黒目川の上流域へ広げられていたように思われ、強清水遺跡や野火止野塩遺跡などの清瀬市域にみられる早期の遺跡は、その規模からこれら河口を拠点とする集団による内陸部での季節的な猟期のキャンプ跡である可能性も指摘できます。

さて、早期の住居は、猟師が山へ入ったときにつくる草や枝葉を使う雨露をしのぐていどの簡易なもので、炉は外に設けられていました。野火止野塩遺跡から発見された炉もこうした屋外の炉で、その近くには小屋掛けした住居が建てられていたようです。

付近からは早期後半に属する四個体の土器が出土していますが、これらはいずれも当時流行した底の尖った土器で、表面にはハイガイなどの背を押し引いた痕跡が残されています。

底の尖った形は、火のあたりを良くするために考案されたといわれ、地面に突き立て、周囲を石で固定して煮炊きに使用しています。また、器面にみられるすじ目は、巻き上げによる粘土紐の重ね合わせを密着させるための調整痕ですが、この貝で押し引いたすじ目に、何かを意味するモチーフが意識されていたことも考えられます。

このように早期後半から前期初頭の土器の文様には貝類が多用されていますが、これは気候の温暖化で繁殖力を強めていた貝類に対する当時の人々の強い関心があらわれているようで、このことが土器の制作に貝類を用いる意識を生み出していったように思えます。

■早期の土器（伊勢遺跡出土）

出土した土器のなかには、口近くに補修孔といわれる一対の穴を開けた土器もみられますが、これは使用中に生じたひび割れを動物の腸や革紐などで締め上げて固定したもので、用具を大切にしていた縄文人の意識を知ることができます。

2

早期がおわり、前期に入っても自然環境に変化はみられず、現在より二度ほど気温の高い状態がつづいています。

清瀬では、柳瀬川や空堀川に沿う下宿、中里、野塩地区に八ヶ所の遺跡が確認されていますが、それらのうち下宿地区の強清水遺跡と下宿内山遺跡からは住居跡も発見されています。

この時期の住居は一段としっかりしたつくりになります。方形に地表を二十〜三十センチ掘り下げて床をつくり出すものが多く、床面積の平均は二十平方メートル（十二〜十三畳）ほどで、炉が屋内に設けられています。

大規模な集落では、住居を台地の縁に輪状に点在させ、中央に広場を設け、数世代にわたり定住する集団も増えています。

前期にみられる定住集落の発生は、当時の人々が安定した社会を築くため、獣類から身を守りながら集団の力で自然を克服していく段階に入っていたことを物語っています。

貝塚から発見されるシカの骨には雄が圧倒的に多く、乱獲を防ぐために子を生む雌ジカの狩猟をひかえていたことがあきらかにされていますが、こうした意識は人口増加とあいまって、すでにある種の動物相の増減を管理しはじめていたことをあらわします。

これは動物相だけではなく、ある研究者は貝塚から出土するカキ殻に、棒状のものに付着したような窪みのみられるものが大半を占める事例から、養殖されていた可能性を指摘しています。

カキは左殻が他物に付着する習性があり、古くから海中に竹を立てて幼生を着生させる養殖法がおこなわれていますが、この方法は竹を立てるだけのもので、波のおだやかな内湾であればどこでも行えます。近代的な養殖や栽培も、動植物の生態を知り手助けしているに過ぎないわけですから、縄文人がそれらの繁殖を助けることは充分できたはずです。

考古学では縄文中期農耕論が盛んですが、これは栽培などの定義をどうとらえるかが争点になっています。しかし養殖や栽培の原初には、こうした雌の殺傷を制限したり、棒を海中に立てたり、また野山に実のなる木が自生していれば周辺の雑木を取り払うなど、ごく簡単な作業からはじめられたことでしょう。

縄文人が、集落をつくり定住できるようになる背景には、集団の知恵と力で、自然界の一部を管理しはじめていた姿がイメージされてきます。

3

下宿内山遺跡からは、前期と思われるヒスイと系統を同じくする蛇紋岩でつくられた二点の首飾りが出土しています。

装飾品は、外敵に立ち向かう強さや、災いを回避する威力の誇示を造形化したもので、かれらの精神世界を表現するものとして生み出されています。

■首飾り（下宿内山遺跡）

■以下中期の土器

（野塩前原遺跡）

（野塩外山遺跡）

全国的にみると、当時すでに発達した漆工芸の存在していたことがあきらかにされており、福井県鳥浜貝塚からは生漆にベニガラや炭粉などを混ぜた赤漆や黒漆で塗られた木製の櫛や容器が出土していますが、彩色という用具本来の機能とは別次元の人間の意識に深くかかわる技術も、かれらの精神世界の広がりとともに高められてきています。

ここからはしばらく、縄文人の精神世界を探ることにします。

先に貝塚から出土した骨の分析により、雌ジカの殺傷を制限していたことを述べましたが、それが事実とすれば集団間に共有された規律が存在していたことになります。そして、その規律を維持していくためには、雌ジカの生態にかかわる子を生む能力などの神秘性に対し、ある種の自然神的な意味付けもなされていたはずです。

自然界の一部を管理しはじめていたかれらの意識には、獣以外にも鳥や植物などについての意味付けが累積していたと思われ、それらは風や雨や炎といった実態のとらえにくいものにまで波及し、ひいては狩猟神や魔神などに代表されるさまざまな観念も生み出していたことが考えられます。

こうしてみると、かれらのなかに自然界を高度な生死観で創造する畏敬（いけい）に満ちた思想の存在していたことが想像されてきます。

縄文時代早期にはすでに埋葬された人骨がみられ、かれらのうちに古くから生死観の存在していたことはあきらかですが、注目されるのは人と同じように犬の埋葬もなされていることで、人と犬を合葬した墓さえ発見されています。

犬は早期には狩猟などのために家犬として使われていますが、そうした人間と行動を共にするもの、また益や害を及ぼすものについて、多様な観念を発達させていたように見受けられます。

こうした縄文人の精神世界は、土器文様にもっとも強くあらわされています。土器をつくるための粘土は、自由な造形表現が可能で、縄文人はこの素材を使いさまざまな文様を生み出しています。

しかし、一見自由奔放につくられているようにみえる土器には、時期や地域による一定の型式が存在し、今日の芸術家がつくり出す作品のように個人の創造的な自由表現は求められていないようなのです。

土器に現された文様は、数十年という流れの中で変化が起きており、その型式の変遷により、研究者はいつの時期の、どの地方のものという判断ができるのですが、このことをさらに深めて考えると、ある一時期だけ取り上げた場合、現代では考えられぬほど変化に乏しいことが指摘できます。

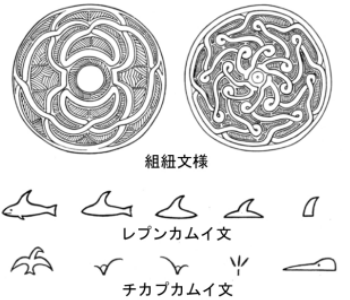
土器は縄文時代を通して見たとき、中期にもっとも立体的で装飾性に富む表現が現れています。

文様のなかにはヘビ・ムカデ・カエルのほか人間の顔をモチーフにしたと思われるものもみられますが、それらはいずれも抽象的な表現で描かれています。これは容器としての土器に限らず土偶についても言え、縄文時代には写実的な手法の発達は認められません。

わが国における写実技法は、江戸時代後期以降の西洋絵画の導入によりもたらされたもので、江戸時代の庶民が浮世絵に描かれた役者の絵を見て、……これは何という役者だ……、……この役者を書いた絵師は下手だ……と言っていた当時の感覚は、現代のわれわれにしてみると、本当にこの絵で判断できたのかと思うほど抽象的で

（右上・下…野塩外山遺跡）
（左上…野塩前原遺跡）

■アイヌ文様



理解に苦しむところです。

しかし、写実とはカメラに写し出された一瞬の画像のような世界ばかりでなく、そこに心理的な要素が強くなれば必然的にデフォルメされていきます。

北斎の永代橋には溢れんばかりの人の波が描かれていますが、これは賑やかな様を表現するためのもので、船が通る瞬間的な情景に時間を凝縮させた橋上の情景を重ね合わせているように思えます。そして、このようなデフォルメされた表現にこそ当時の人々は写実世界を描き出していたことになります。

縄文土器に表わされたさまざまな抽象的モチーフは、自然界に対する畏敬の思想に裏付けられた、かれらの写実世界ではなかったのでしょうか。

さて、これらのモチーフのなかには、われわれにヘビや人間の顔と判断させる半写実的なものもみられますが、その多くは渦巻や弧線などの抽象化された文様で飾られ、それが何をあらわしたものなのか理解し得ないものばかりです。

こうした文様の発達は、縄文人と同じように狩猟を生活の糧としてきたアイヌ民族にもみられます。

このアイヌ民族の伝統的な文様には、一般的にもちいられる網目文（アイウシ文）や渦巻文（モレウ文）のほか、海を支配し、鯨を岸に寄せてくれる沖の神レプンカムイと信じられたシャチの背鰭を表わすアシペ文、また便りをとどけてくれる神のチカプカムイを表わす鳥の翼をひろげた姿やその足跡文。神の虫を表わしたウオッキキリといわれる円を直線でつないだ文。ギョウジャニンニクなど除魔力のある植物の象徴化されたものと思われるプンカラシリキといわれる唐草文などがあり、一つひとつの文様には信仰を背景にした意味付けがなされています。

なかでも渦巻文は、「からまれる」「結ばれる」ということに大いなる意味を見いだしていたアイヌ民族にとり、それを表わす大切な文様とされ、伝統を守り伝えていく祭具に多用されています。

文字をもたぬかれらには、「オイナ」といわれる聖伝や、「ユーカラ」といわれる英雄伝を語る叙事詩とともに、文様は、民族の意識を時代を越えて子孫へ伝えるための大切な手法となっています。

縄文土器を飾る文様にも、このような狩猟民族のなかで生み出された文様観が存在していたと思われ、本来機能を重視すべき煮炊きに用いる土器に立体的な装飾文様が施されていることは、実生活と宗教観が未分化な状態にあったことを物語っているのかも知れません。

、縄文時代後期以降煮炊きに使われる土器に文様の簡素化がみられ、また弥生時代に高坏などの儀式専用の土器の形が出現してくることは、稲作の導入や年中行事の成立とも関係し、実生活と宗教観が分離しはじめ、祭り事が季節の中で時期ごとに集約されていく過程を表わしているのではないでしょうか。

■早期・前期の遺跡分布
（志木市、朝霞市域を除く）

こうしてみてくると縄文人には自然界にさまざまな神が創出されていて、煮炊きといえども、そこにはそれを司る神の存在が常に意識されていたことが想像されます。土器を飾る文様には、まさにこのような神々の降臨した姿を表わしていることも考えられてきます。

4

前期から中期への装飾文の発達には、原始的な栽培技術の発生などに裏付けられた社会環境の安定があったと思われますが、この時期には長野県八ヶ岳山麓に井戸尻遺跡、尖石遺跡、また群馬県赤城山山麓に三原田遺跡など大規模な集落が出現しています。

清瀬でも、中期にはいると遺跡数に急激な増加がみられ、柳瀬川や空堀川に面した台地上に大規模な集落も営まれるようになります。この一帯は動植物相も豊富で、河岸段丘下には多くの湧き水が発達し、定住するには絶好の環境でした。

空堀川流域の野塩八幡神社南の台地上に所在する野塩前原遺跡は、そうした定住集落の一つで、発見された住居跡からはおびただしい数の土器や石器が出土しています。以下、発掘調査の成果をもとに、この家に住んでいた縄文人たちの生活を復元してみることにしましょう。

今から四千五百年ほど前。空堀川を見下ろす台地上に縄文人の集落がありました。広場を囲むように五、六軒の家が建ち並び、その裏手の台地下には湧水へつづく道がつけられていました。

この水場の下を流れる空堀川は、雨が降りつづくときには激しい流れをみせますが、ふだんは水量が少なく、干上がることもしばしばありました。したがって、ヤス

黒曜石のナイフ

肉を切る

土器を蒸し器に使う方法
（敷物の下に水を入れる）

木の実を割る

や網を使った漁は川魚が豊富な柳瀬川でおこなわれていたようです。

空堀川から柳瀬川にかける一帯にはクヌギやシイ、コナラの自生する林がつづき、季節には木の実やフキ、ワラビ・キノコなど様々な食料を得ることができ、またシカ、イノシシ、カモなども豊富で、弓矢や各種の仕掛けを使った猟もおこなわれていました。

当時、柳瀬川沿いにはいくつかの集落があり、それぞれの集団ごとに猟場が決められていました。しかし、天候不順で食料の獲得が困難なとき、また今日の志木市あたりに形成されていた柳瀬川の河口付近で季節的な海の漁をするときなど、他集団の猟場へ入るようなときには獲物の一部を猟場を保有する集団へ分け与えてくる習わしもあったことでしょう。

野塩前原遺跡にいた集団は三十人ぐらいでしたが、こうして得た獲物は年齢や性別により各々に分配され、一部は冬期の保存食料として加工されます。

縄文人の食物の調理法を知ることは困難なことです。しかし、炭化したパン状の食べ物や、蒸し器とするために中ほどに編み物を入れた痕跡を残す土器の発見された遺跡もあり、今日みられるようなさまざまな方法のあったことが予想されます。例えば

焼く　・火で直接焼く。

あぶる　・熱した平石の上で焼く。
・火の回りに刺してあぶる。

煮る　・土器に入れて煮る・

蒸す　・土器の中ほどに編み物を置き、下に水を入れて蒸す。
・木の葉や粘土に包み、炉の灰にくべて蒸す。

いぶす　・炉の上につるし、煙でいぶす（燻製）。

干す　・天日で干す。

発酵させる・土器に入れ、革などで蓋をして発酵させる（果実酒等）。

などは、当時の技術でも充分にできたわけです。

もちろん、基本的な動物の解体にかかわる、**剥ぐ**、**切る**、**削る**、ためには石や貝製のナイフがあります。われわれが日常使う金属の包丁は、肉を切りつづけると、次第に脂が付着して切りにくくなりますが、当時の石製ナイフは刃がノコギリ状であるためにいつまでも変わらずに切りつづけられ、切り口の姿さえ問わなければ今日の包丁よりも機能的でした。

この石匙（せきひ）といわれるナイフに関し、ある学者は一般書のなかで、遺跡から出土したものを実際に使い実験したところ「まったく切れなかった」と力説していますが、これは縄文人が刃の摩耗により廃棄したものであるためで、遺跡からの出土品の多くが、使用できなくなる状態で廃棄されたものであることを考慮しない偏見です。

さて、食料の保存に関しても、さまざまな調理法の組み合わせがみられたはずですが、そのことについて狩猟民族であるアイヌの事例を参考にみていくことにします。

まず食料の保存には、短期間の場合と長期間の場合がありました。短期間には天日干しだけの簡便な方法がとられていますが、ここでは主に長期間の保存について述べていくことにします。

獣肉の代表はシカです。

細かく切り裂いた肉をいったん煮て脂抜きし
↓
それを天日で干し
↓

木の実を割る、
すりつぶす

石を割り
石器を作る

粘土から土器を作る

蔓や木の皮、麻などから繊維を採り
編物や織物、ナワを作る

■縄文人の知恵

さらに炉の上につるして燻製にしてから

←

樹皮に包む

方法がとられています。また、小魚は天日干しのほか、

一度焼いてから

←

天日で干し

←

炉の上で充分乾燥

させる方法もありました。

このような天日干しの方法は山菜の保存にもみられますが、種類によりワラビ、ゼンマイ、フキなどのように

煮てから

←

干す

ものもありました。

このほかにも、先にあげたパン状の食べ物をつくるため、木の実やカタクリなどの球根からデンプンもとられていました。この方法は

石の台の上ですりつぶした木の実などの粉を

←

土器に入れ、水でさらして沈殿させたデンプンを

←

乾燥する

ものですが、このときアクの強いものには

灰で煮るアク抜き

がおこなわれています。この方法は樹皮からとりだした繊維をやわらげるときにも用いられており、灰は利用価値の高いものでした。

野塩前原遺跡から発見された住居跡の炉には灰が残さ

れておらず、建て替えにさいして灰を持ち去った形跡が認められますが、これなどは食物の保存や糸や縄をつくるために植物繊維を柔らげるアク抜きに使用されていたのかも知れません。

かれらはまた、獣脂から明かりを灯す方法も知っていたようです。というのは、当時釣手形土器とよばれる特殊な形をした土器が出現しており、神などへの供え火に使われていたらしいのです。

獣脂を集めるには、脂身を煮ることで上に溜まる脂分をすくい取る方法が一般的で、それを保管するにはクマなどの腸が用いられています。

この脂は魚油とならび、長期保存した肉を煮戻して食べるときの味付けとしても利用されていました。

以上、アイヌ民族にみられる調理方法を参考にして縄文時代の調理法について考えてきましたが、ここで貝塚や花粉の分析から明らかにされた当時の代表的な食物を列記しておきます。

獣類　・シカ、イノシシ、タヌキ
鳥類　・カモ、キジ、ツル
魚類（川）・コイ、フナ、ウグイ、ウナギ
（海）・タイ、ハゼ
貝類　・シジミ、ハマグリ、カキ
山菜　・ワラビ、ゼンマイ、フキ、ノビル、ヤマノイモ、キノコ
木の実　・クリ、クルミ、トチノミ、ドングリ、ノブドウ

清瀬周辺でも、これらのものが狩猟採集の主な対象となっていたことでしょう。以上、食生活についてみてきましたが、ここからは野塩前原遺跡の縄文人の住まいを探ることにします。

5

縄文時代中期の家を復元的に紹介すると、次のようになります。

床を掘り込んだ竪穴式住居といわれる半地下式の住居で、屋根は床に穴を開けて立てる四～六本の掘立柱で受けています。

内部の広さは十畳ほどで、ひさしを出した南側の出入り口から梯子をつたって室内へ入ると、中央やや北寄りに底を打ち欠いた土器を縁に埋め込む炉があり、その上には食物を乾燥保存するための火棚が設けられています。

部屋の周囲には土壁の崩れを防ぐための樹皮がめぐり、堅く踏み固めた床に枯れ草や樹皮で編んだ敷物が敷かれ、その上に山菜を入れた籠や土器が置かれています。

この家に住んだ縄文人の家族は、数十年後に、柱の根腐れなどで壊れかかったこの家を廃棄して別な家へ移り住みますが、その際には柱や屋根材のほか、木の実のアク抜きに用いる炉の灰など、まだ使用できる材料はすべて運び出していたようです。

廃棄された家跡の窪地は、土が自然に流れ込んで埋まりきるまでの数十年間にわたり、集落内の壊れた土器や消耗した石器を始末する場所として使われています。

こうした家跡の埋没土から発掘された土器の多くは、生命を終えたものを葬るかのように、そっと置かれた状態で出土するものが多く、その中には一ヶ所にまとめられた網のおもりや、一対の耳飾りなど、所有者を亡くしたことで放棄されたと思えるような原形をとどめたままに発見される遺物もみられます。

かれらは器物に対し、破損して不用となっても、現代

炉跡

住居跡

埋没土に廃棄された遺物

■野塩前原遺跡の住居跡と家の想像図

■野塩前原東遺跡から発見された墓跡

人がそれらに抱くゴミという感覚はなかったようです。

たとえ割れてしまった破片でも……すべての物には魂が宿る……というような観念により、機能を失った物にある種の生命を昇華させる意識が働いていたのではないでしょうか。

人の生活を終えて埋没する住居跡。そこは、まさにそうした生命を送り出す場として位置づけられていたように思えます。

こうした思想をもつかれらは、どのような姿をしていたのでしょうか。

全国から発見された骨の分析結果から明らかにされたところでは、平均身長百五十八センチ、筋肉質で、堅い食べ物を噛みこなすために顎（あご）の発達。平均寿命は三十歳ていどと報告されています。

不安定な食生活と重労働から老化は早く、ある遺跡からは骨折箇所がこぶ状になった人骨が発見されていて、骨折しても働かねばならなかった縄文人の過酷な生活状況が明らかにされています。

また、乳幼児の死亡率も高く、幼児骨を入れた埋め甕が住居の入り口付近に発見されることも多々あります。

地方では類似した風習が最近まで伝えられており、こうした事例では人の出入りの激しい場所に埋められ、踏まれることで、その魂が強い魂に生まれ変わり、次の生命体へ受け継がれて行くと考えられていますが、すでにこうした観念に通ずるものが縄文時代に存在していたことが想定されています。

乳幼児の死亡率が低下したのは、医療機器や衛生観念の発達したごく最近のことです。

茨城県猿島郡弓馬田村に残されている明治四十年前後の記録では五年間に千四十八人の子どもが生まれていますが、そのうちの三十七パーセントもが死産あるいは四歳未満で亡くなっています。

野塩前原遺跡にいた縄文人も、数世代にわたり定住し、一見安定した社会を築いていたようにみえますが、実は無事成人を迎えられたのは五割ていどではなかったでしょうか。

野塩前原遺跡の集落は、後期に入るころから急速に衰退しますが、これは中部から関東地方へかける広域的な現象で、八ヶ岳山麓にみられた大規模集落も解体するものが多くなっています。

ある研究者が遺跡数から割り出した縄文時代の推定人口によると、関東地方では早期一万三千人、前期四万三千三百人、中期九万六千六百人と増加してきたものが、後期に五万二千百人へと減少に転じ、晩期にはさらに急激に減少することが指摘されています。

このように、中期に増大した遺跡数は後期から晩期へ向け急激な減少をたどりますが、このことは初歩的な栽培や養殖など、自然を管理しはじめる技術を習得しはじめていた縄文人の知恵をもってしても回避できない何かが生じてきたことを暗示しています。

その要因の一つに気候の寒冷化があります。

中期を境に気温は低下しはじめ、後期中ごろから弥生時代中期初頭にかけては現在よりマイナス三～四度、海岸線は前期より十五～二十キロメートル後退し、川口から板橋付近に形成されていました。

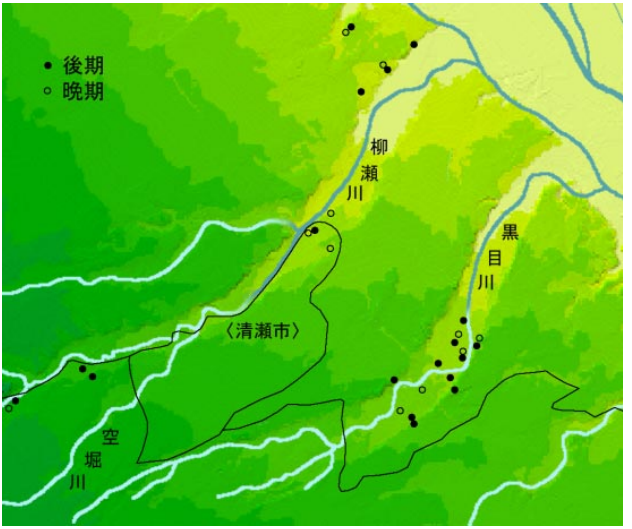
この環境の変化で貝類の生育は悪化。それらのなかには、ハイガイやイタボガキのように姿を消すものさえでてきていました。

柳瀬川流域の遺跡数の減少。それは気温の低下による植生の変化や海岸線の後退で海産物の獲得が困難になっ

たことが影響しているように思われますが、ここに後期から晩期の人口減少をもたらしたと考えられるもう一つの要因があります。それは火山活動の活発化です。

もともと日本列島にはたくさんの活火山があるわけですから、縄文時代の各時期にも噴火による火山灰の影響はあったことでしょう。しかし、気温の低下に合わせるかのように起きた富士火山や浅間火山の活動は、縄文時代前半期にはみられないほど活発化しています。

富士火山帯では、一万年前に静穏期にはいっていた活動が五千年前から再び活発化しはじめ、縄文時代後期初頭から弥生時代前期まで激しい爆発性噴火のくり返されていたことが明らかにされています。



■後期・晩期の遺跡分布
（志木市、朝霞市域を除く）

この噴火で上部に成層火山が発達し、多くの寄生火山ができ、現在みられるような富士山の姿が形成されてきたわけですが、それらの火山灰が浅間山のものとともに関東地方に降下しつづけているのです。したがってこの時期には植物の生育が悪化し、それは動物層へも影響を与え、また土壌への汚染も川から海へと広がり、少なからず河口の貝類の生育に被害を与えていたことでしょう。

半栽培や食料保存技術の進歩により、人口増加をもたらしていた中期社会は、この気温低下と火山活動の活発化による自然環境の劣悪化から衰退しはじめ、食料獲得は、直接影響を受けやすい陸上の動植物から海産物への依存度を高めていったことでしょう。

後期以降にみられる広域にわたる遺跡数の減少については先に述べましたが、それを細かくみると内陸部に比して海浜部の遺跡数の減少は緩やかで、また印旛、手賀沼周辺のように、後期にはいるころから先を争うような貝塚遺跡の激増している地帯のみられることは、海へ依存する傾向の強まっていたことを示しています。

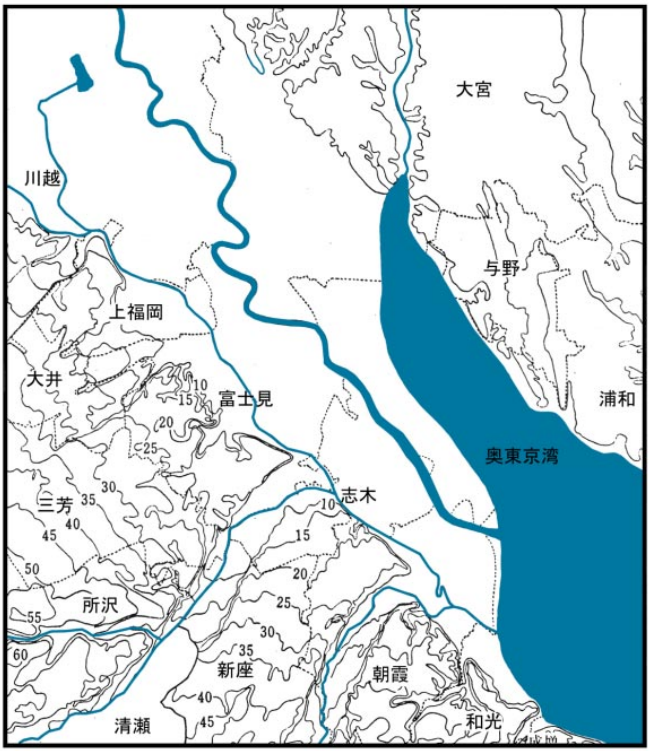
柳瀬川流域では後期以降の遺跡の発掘例が少なく、具体的な生活状況について説明することはできません。しかし、一般的には抜歯や装身具、また土偶や石棒、敷石住居、埋め甕など、信仰にかかわるものが発達しており、この時期の社会にある種の思想的な高まりのあったことが感じられます。

土偶は部分的に打ち割られているものが多く、埋葬状態で出土するものもみられることから病やけがの身代わりとして土偶に転化させたもの、また石棒はその形状から豊饒（ほうじょう）や繁栄を意図した生殖神の表現ではないかといわれています。

環境の悪化は、当時の社会に深刻な影響を与え、乳幼児や老人の死亡率の増加を招いていたことは想像に難くありません。晩期の人口の激減は、かれらの社会生活に実生活と分離できない極度なまでに発達した宗教観をうえつけていたのではないでしょうか。

やがて、晩期も終末を迎えると、低下していた気温が回復し、火山活動も停滞しはじめています。

■後期の海岸線



かれらはこの安定を保ちはじめた環境のなかで新たな時代を切り開きはじめ、以前から細々と培ってきた半栽培の技術を基礎に、大陸から伝えられた稲作の技術を導入し、それを大きく発展させます。

種を蒔き収穫までの期間を待つこと、またその間の除草などの効果がどれほどあるかなど、充分理解したはずです。もちろん、それらの導入は狩猟採集に併用した小規模な農耕からはじめられたことでしょうが、二百年たらずのうちに、稲作が九州から東北まで列島を縦断して稲作が伝播した現象を考えたとき、この生産体系の大変革に、自然環境の劣悪化で長く停滞せざるおえなかった縄文社会の反動が映し出されているように思えます。

清瀬市郷土博物館
学芸員　内田　祐治

平成五年十一月発行の展示解説
「縄文時代の生活を探る―清瀬の原始―」を
平成十七年三月にＰＤＦ版として改定増補したものです。